



史跡

7 1. 館家の五輪塔・板碑群

■指定年月日 昭和63年3月18日(1988)

■指定面積 34㎡

■所在地 正院町正院 19-20-6

■所有者 珠洲市

この石塔・板碑群^{しよういん}は正院町に所在する館家の裏の畑の一面にあり、現在は五輪塔の地輪^{ちりん}で矩形をつくり、その中に五輪塔と板碑^{ぼいき}が集積されているが、元は、周辺の畑を含めた地域を墓域とする広大な墓地であったと思われる。戦前は竹藪^{やぶ}であったといい、開墾を進めるうちに、館家が奉仕する薬師の祠^{ほこら}の脇に集積し、最終的に現在の様な状態に整理されたものという。

まず五輪塔であるが、地輪^{ちりん}がもっとも多く、次いで水輪^{すいりん}が30以上、その他の各輪から推定して元は50基以上はあったと思われ、高さは復元高で50～60cm程であろう。なお、この中に一石五輪塔^{いっせきごりんとう}(各輪を組み合わせるのではなく、一つの石でつくられ

た五輪塔)が2基ある。

次に板碑であるが、“館薬師”と称する祠に納められている3基を含め29基ある。大別して方錘型^{ほうすい}と畿内型^{きない}に別れ、五輪塔や仏^{ぼんじ}、梵字^{ぼんじ}が刻まれている。宝篋印塔^{ほうきやういんとう}の残欠や、相当数の珠洲焼^{すず}のほか、越前焼^{えちぜん}や近世の磁器も出土しており、年代もかなりの幅をもった遺跡といえ、珠洲の中世の歴史を知る上で貴重な文化財である。